



＊ 報 會 樹 葉 針 ＊

號 三 十 九 第 卷 通

テムボオシユウンゲ

A R A

昨冬乗鞍スキー合宿で専門部の前田君から「アールベルグスキーの欠點は何だ、斜滑降の時體重を谷側に掛けるのは堂だ。」と言ふ質問を出されて面食ひ卒業後六年間の不勉強を痛感させられた。そしてゐる中に岩原から歸つて來た小谷部の言ふには、女の子迄テンボシユウンゲやつてゐるので俺達のやつてゐる廻轉がみつともなく見えて仕様がなすが、山へ入つたらあんな事出来やしないよと同感を求められたが實はテンボシユウンゲとは具體的に何を指すものか知つてゐなかつたので何か勉強をと思つてゐるさ
 もろ／＼の新スキー術だと言ふインチキ本（例へば馬場忠三郎の本等）の種本とも見られるラインル・ドウシア共著 Skilauf von heute、之から派生したアレーのスキー・フランセの譯本が續いて出版され、その中前者は熊さん所へ贈呈されて來たので之を借り受けて一讀、中々参考になつたので前田君への解答を兼ねて紹介批評をして見ます。

譯者の解説に依れば著者ラインル・ドウシアはティロオル出のスキートレーナーで、アレー以下が佛蘭西の新らしい技術として喧傳したものは彼等ティロオル出の十數名のトレーナーの教授したものだと言ふ。

その主流をなす所を簡単に要約すれば

一、外傾（谷傾）姿勢―前傾姿勢を伴ふ。

二、如何なる場合に於ても外側足に荷重して遠心力で廻轉。
 の二點に盡きよう。以下その主張を之に對し疑問を呈出しつゝ展開して見よう。

『外傾姿勢とは從來の内傾姿勢と同じ形であるが唯積極的に上體を外方に折り曲げる (hinanbeugen) 即ち内傾と言ふ消極的姿勢でなしに積極的

上體を外に乗り出して行くと言ふ意味で外傾(又は谷傾 Tallage)姿勢と言ふのである。(三五—三七、一七九、一九一頁)

斜滑降の正規の姿勢は此の外傾姿勢を取つて體の正面はほんの少し谷側を向く。此の體の振り向けは山側スキーを前に押し出す事に依つて自然に行はれる。そして此の場合腰骨の線と兩肩の線とが重なる様にする。外傾、姿勢を強めるには上體を腰の所から軽く外へ折りまげれば良い(又は谷側の足の膝を曲げてよい)。

此の姿勢をとる斜滑降の場合には體重は主として谷スキーにかゝる事になる。外傾が強ければ強い程體重はより多く谷スキーにかゝつて行く。』(三五—八頁)

之で外傾姿勢と體重谷足が分つた。勿論此の姿勢は前傾を伴つてゐる。要するに従來の理論で云ふクリステイアニアシュヴング後の内傾姿勢を取り、之より上體を積極的に外へ折り曲げ體の正面は谷側へ向ける——谷側肩を後へ引く——と言ふ姿勢なのであるが、著者の主張する様に此の姿勢を取るに體重は谷足に掛るであらうか疑問である。谷足に掛けるに主張するのではなくて、自然に掛ると主張するのである。會員諸君の御研究を願ひ度い。體重谷足は斯くの如く自然にそうなるのであつて、此の爲めにどういふ便利があるか本書には書いてないが廻轉外足荷重(體重を掛けると言ふ意味)の廻轉を主張する立場としては、廻轉終了姿勢が即斜滑降正規姿勢となる譯で此の邊に一貫した所が見られるのである。谷足體重はスキーが山側角付けしてゐるのであるからスキーが山側に廻轉(山側に廻轉する事は一一三—四頁に於ける著者の主張する所からも推論出来ると思ふが如何)し、スキーの後

端がすり落ち滑降を不安定にするのではないかと私には思はれるのである。特に斜面が急或は堅い場合は殊にそう思はれるので、斜滑降に於ける體重は兩足平均、或は寧ろ山足に多く掛けるべきではないかと考へられるのである。此の點以外は外傾並に體の正面谷側向けは正しい主張と思はれる。優れた滑走者が無意識に取つてゐる姿勢を鋭く摘出した點は卓見である。

さて次に廻轉に就てゐるが、シュテムボーゲン、次にクリステイアニアと順序を追つてゐるのは從來同様であるが、ボーゲン——シュヴングの間には何等つながりは無く、初心者かボーゲンの完成に過度の努力を拂ふのは意味がないとのべてゐる(四三頁)。此の點に就ては大いに疑問があるのであるが、シュテムボーゲン(プフルウグボーゲンを含めて)廻轉に於て注目すべき點は廻轉外側スキーへの荷重に於て外側の肩を入れぬ事、上體を斜め前外(廻轉外側)へ倒して行き前傾と同時に外傾を得て體重外足——新らしい谷足となる——に依り廻轉を終了し、先に述べた正規の斜滑降姿勢に移る(四六、五一頁)のである。外側の肩を入れぬと言ふのは廻り過ぎを防止する爲めには非常に大切であり、此の意に於て大いに考へさせられる點である。殊にクリステイアニアシュヴングに於けるひねりの問題と關聯して此の點は非常に重大である。

扱ひよく、本書の主眼たるクリステイアニアに移らう。本書に於てはクリステイアニアは「シュヴング」といふ言葉で總括されてゐるのであつて、『廻轉を産み出す力は「遠心力」或は正確に言ふならば「慣性」なのである』即ち廻轉のキツカケ(cant)を

與へるならば、そして強い前傾と外傾姿勢を取るならば、スピードの慣性に依つて獨りでに自然に廻轉すると言ふのである。そしてそのキツカケ——即最初の方向變換——の方法として次の三つの場合を擧げてゐるのである。(五六頁)

一、鉄型姿勢(シェーレン)

二、開き出し(アンシュテムメン)

三、兩スキーの方向を同時に變へる(バラレル)

キツカケの方法により前述の通りクリステイアニアを三つに分類してゐるのであるが、他の場所『此の廻轉——バラレルシュヴング——は深い雪の中でも亦行ひ得る。ただしその代り前よりも一層大なるスピードを必要とする。だからスピードの足りない場合には、殆んど目に見えぬ位ほんの僅か内側スキーを先開きにして鉄形にして廻轉を助けるのである。しかし前外傾姿勢はこの場合にも決して弱めてはならない。上の如くしてわれわれは純粹のバラレルクリステイアニアから、これとほんの少し相違したところのあるシェエレンクリステイアニアに到達したわけである。』

(一一六頁)と述べてゐる通り、シェエレンクリステイアニアはバラレルより派生したものと考へ得るのである。従つて從來の教科書では、内足荷重と説明のあるシェエレンに於ても、本當は外足體重廻轉を主張し、スキーの先端の取る鉄形は舵であり内スキーが鉄形の舵に依つて最初の方向變換をなし、所謂キツカケを與へるものである。

シェエレンクリステイアニアは從來の説明では内足體重、しかもスキーの後部體重——之の故に後傾となり、高速度廻轉には不

向として排斥されたのである——として廻轉したものであるか、本書の主張に依れば内側スキーは單にキツカケを與へる舵であり外傾前傾姿勢に依つて外足荷重さなし之を以て廻轉する。勿論體のひねりはない。私の疑問とする所は體のひねりもなく、舵スキーに荷重するでもなし、單にキツカケを與へる丈で外足荷重に依つて廻轉が生ずるであらうかと言ふ事である。此の點に就ては附録たるデエブラアの「スキーの前半荷重について」なる論文に於て、『新しいテムボ技術に於ても同様に或は内足に乗り(シェエレン)、或は外足に乗り(シュテム)、純粹なシュヴングに於ては兩足でそれ〴〵シュヴングを行ひ得るのである……。』(一四五頁)と述べられてゐるのは同じテムボ技術の主張者の言葉として非常に興味があるのである。

第二の開き出し(carstennen)クリステイアニアは從來のステムクリステイアニアであつて、根本的には何等相違してゐる點はないのであるが、從來の様に廻轉後半に於て内傾姿勢を取る事を説く代りに『膝から行ふ前上への跳ね伸び』に依つて鋭い前外傾を説くのであつて、一見全然内傾のなきが如き感じを與へられるのであるが、勿論鋭い弧を描く場合には遠心力に耐へる爲には『身體を全體的に廻轉内側へ傾かして行かねばならない』のであつて要はその『相對的外傾姿勢』を亂してはならないのである。(六〇頁)從來の「ステムクリステイアニア」なる語の代りに「開き出しクリステイアニア」なる語を用ひたのは、より適切であり且又その説明に於て之がステムボーゲンとクリステイアニアとの結合せられたるものであり、ステムの割合の大小に依つてよりボーゲンに

近づいたり、バラレルクリステイアニアに近づいたりするものであり、雪面の状態、滑走者の能力の如何に依つて、『如何なる中間型に於て行はれやうとも差支ない』と説いてゐるのは全面的に賛意を表する所であり、既存の教科書には感じられない何か著者の身についたものがはつきりと窺はれるのである。

第三の平行クリステイアニアは『シュヴングの完成した最高のものであり兩スキーは始めから終りまで一貫して正規の滑降姿勢のポジションを取つて廻轉』をするものである。谷廻り廻轉に就て説明するならば、廻轉のキツカケは、視線の方向即ち斜め前・外に向つて、即ち谷側に向つて跳ね伸び、兩スキーは廻轉内側角付、内スキー前出し、——此處にシエレンとの繋りが見られる

——姿勢全體を廻轉外側へ向けて（外傾）、外側荷重さなるのであつて、キツカケは之で終る。キツカケが終つてから、即ち外側スキーに完全に荷重された瞬間から第二段階の本來の廻轉が始まるのであるが、從來ならば此處で體（腰並に肩）のひねりを入れてと説明するのであるが、本書ではひねりは排斥せられて、この外足荷重の瞬間から『滑り落ちるにまかせてをけば、遠心力がひとりで終りまでシュヴングを繼續して行く。即此の第二段階に於ては滑走者は廻轉の舵を取る（廻轉を希望する軌道に正しく向けて行く）こと以外には爲す事はない』（八四頁）と説明する。そして舵を取るためには身體の姿勢とスキーの位置變化を行ふのであるが、前傾と外傾を強化すれば廻轉弧の半徑を小にし、外傾のない時は弧を大きくすると言ふのである。（八五頁）要するに開き出しクリステイアニアでも同様なのであるが、廻轉にキツカケを與へ

た後は、外足荷重さへしてゐれば遠心力がひさりで廻轉させて呉れる。從來の様に體のひねりを教へるのは誤りだ、テムボに乗つて美しい廻轉をなすには従つて鋭い前傾と外傾が絶対に必要なのだ、と言ふのが本書を貫く理論なのである。之を讀んで見ると此の最高技術たる平行クリステイアニアも極く簡單なもの、様に思はれるし、又事實決して難しいものではないと述べられてゐるのであるが、實際に我々がスキーを穿いた場合、ボーゲンが出來ても之のシュヴングが仲々出來ないのが實情である。その困難さは何處にあるかを我々は考へて見なければならぬのである。鋭い前外傾の出來ないのも原因であらう。だが更に重大なのは遠心力が獨りで廻轉させて呉れると言ふ點でなければならぬ。此處でひねりが登場して來るのである。

私の經驗に依れば、外足荷重遠心力廻轉は廻轉の弧が大きくならざるを得ないと思ふ。之は本書中開き出しクリステイアニアの項に於て、『廻轉弧を細長くのばしたければのばし度い程それについて外足スキーの開き出し程度を僅少にして行ばよい』（六九頁）と述べられてゐるのや、鋭い廻轉にはジャンプクリステイアニアの様な特別にスキーを廻轉させる力を與へてゐるのを見て立證せられると思ふのである。

然るに我々は山では鋭い廻轉をより多く要求するのであり、しかも深雪、クラストと言ふ様な條件が普通なのである。之等の事を念頭に置きつゝ、ひねりの問題、遠心力廻轉問題を考へて見度いのである。

先づ「ひねり」とは何であるかを明にするならば、『腰を外方へ

ひねり出す事『肩のシユヴング』ひねりつゝ體を前傾ししゃがみ込んでゆく事(二頁)である。此の一派は斯くの如き「ひねり」を排斥する。然しそれは優れた滑走者は「ひねり」を絶対に使用しないと言ふ意味でなくて、スキー學校の様な所で生徒に教へる場合、ひねりを教へるのは誤りだ、(三―四頁、一七三頁)正しくはひねらずに滑るのであつて、「ひねる」のは例外の場合だと言ふのである。従つて深い雪、重い雪の場合ひねりに依つて廻轉を助ける(一〇七頁)のであり、又ヘヤヒンの様な急カーブを切る時は肩のひねり込みが必要(一八八頁)なのである。又面白い事には「目に見えるひねり」と「目に見えぬひねり」とを混同してはならぬのであつて、排斥しなければならぬ「ひねり」は前者である(一七五頁)と述べてゐる事である。「目に見えぬひねり」とはなんであるか具體的な説明は本書の何處にも見當らぬのであるが、私の先に述べた疑問、即ち外足荷重のみで果して廻轉が行はれるであらうかと言ふ場合に於て、此の「目に見えぬひねり」が重大な役割を持つのではないかと思はれるのである。又直滑降より山廻り平行クリステリアニアの項に於て、キツカケ――廻轉内側角付、外傾、即ち今迄正面を向いてゐた體は、腰を頂點として外方に向つて開いた鈍角を形づくる――に依つて生ずる姿勢の變化の爲めに『兩スキーの後端部が幾分横へずれる』(七八頁)と述べてゐるのであるが之は正しくひねりでなくてなんであらう。目に見えぬと言ふのは技術が上達してゐるので、うまくスピードに乗つて、所謂キツカケ、外足荷重廻轉と一聯の連續が著しいひねりなしで出来るのであつて、同じ條件の下に於ても下手な者は、より多いひ

ねりを必要とするのではないか？目に見えぬと言ふのは技術が上達したからの事であつて、それだからと言つて本質的に廻轉はひねりなしであると言ひ得るであらうか？本書の主張は逆に、私は「ひねり」↓「ひねりなし廻轉」と言ふ様に技術を伸して行くべきではないかと思ふのである。然しながら我々は本書の「ひねりなし廻轉」に依つて、從來の過度の「ひねり」に依つて引き起される廻り過ぎを防止すべき點に重大な示唆を受けるのである。著者の主張する様に教育的意味に於て「ひねり」が有害であるかどうかは、我々の問題にし得る點ではないが「ひねり」は常に相對的のものである、即ち各人の技術、廻轉の弧の大小の希望程度に依るものであり、我々未熟者でも使用して差支ないといふ事を主張し度いのである。特に前述の通り我々は弧の小さい廻轉が欲しいのである。ひねりを取り上げられたら何うなるかを考へて見度いのである。

以上にてラインル・ドウシアの主張の全體は分つたが、前掲ヘルマン・デブラア(どういふ人が私は知らない)の『スキーの前半荷重について』なる一文に於ては、從來のクリステリアニアと新しいテムボ技術との相違は、『荷重關係、即ち前者では體重はスキー後半部にかゝり、兩スキーの旋回點はバツケンのずつと後ろにあるが、後者では體重は膝の後方親趾のつけ根にかゝり、スキー前半部荷重となり、旋回點は前に移動してバツケンの邊りに来る』(一四〇―一四二頁)之丈の違ひであると言べてゐるのはラインル・ドウシアの言ひ忘れた最も重大な點を述べたものとして注目しなければならぬと思ふのである。シエレンも含めて

全ての廻轉は外足荷重、遠心力廻轉でなければならぬとするのは尙議論の餘地あるとしても、旋回點を足の踵より前に持つて行く、即ち鋭い前傾といふ事は無條件に賛成し得べき點であり、それのみが新しきテムボオ技術に依つて教へられる點ではないかと思はれるのである。(次號完結)

乾 德 行 き

神 主

十一月廿日の夜凡ちやんの新家庭を大勢して訪問した折に、久し振りに二人で山に行かうではないかと言ふ話が出た。これは凡ちやんの方から切り出した話なので、新婦こそこの彼を僕が引張り出して無理やりに山行を追つたなんて言ふ非人情な話ではないのである。その時、現役の大塚の話によると、乾徳山は實に好い、近郊の山々で眞に頂上らしい頂上と言ふ感じを與える點この山に比すべき山はない——と言ふ。それでは一度其處を訪れやうと乾徳行きの下相談が纏つた。

林凡ちやんは稀代の雨男である。彼の赴く所雨ならざるは無しとは人の知る處で特に岩崎なんかはその點を身に泌みる程痛感してゐる一人であらう。これは天文學的良識を以てしても尙解せない問題であつたが、然しこのところ凡ちやん頗る強氣になつてゐて、これから晴れだと確信してゐる。その原因は實に新妻を迎えたことにあるのである。と言つても判るまいが、新夫人の御名前が晴子さんと言ふ、従つてこれからは山に登つても晴子さんが祈つてゐて呉れるから晴れこそすれ、雨の降る道理がないと言ふ

のである。

ところが愈々乾徳行きの廿日の夜、新宿驛のプラットホームには冷たい雨がハラ／＼と降つてゐる次第である。名にし負ふ雨男は、その名に違はず雨を呼ぶ。龍虎正に相闘はんとすれば雨到り、凡ちやん山に登らんと言へば雨が降る。新夫人の御利益は仲々に現れない。たゞ風が出て來たのが心頼みである。が駄目なら駄目でその時は甲府の丸茂さんを訪問しやうと二人共に心細い。鹽山驛に着いた。風は雨雲を吹拂ひ、天には星が輝いてゐる。オヤ今日は晴れだ。正に天變地異である。

徳和の部落で朝飯をする。登るに従つて日本晴れで、空は冬の澄み切つた空氣で一杯だ。あの奥底迄は幾萬尋あるかは知らないが、さても雨どころの騒ぎでない。國師平から扇平の茅戸に出て、富士や南の新雪に蔽はれた大觀にたゞ心快く見入り、一時間程寝ころんでゐた。風は冷いけれど實に氣持が好い。凡ちやん新夫人御手製の海苔卷鮎を腹一べいに食べた。實に美味い。凡ちやんの食慾は正に頂點に達してゐる。

頂上に登る。登りつめると、本當に「頂上らしい頂上だ」と言つた大塚の言葉が思ひ出された。富士や南アルプスは手に取る様だし、秩父の連峰には手が届く。會遊の山々の想ひ出が、あの峰あの澤からどし／＼と浮んで來る。古のこゝを忘れなば乾徳の頂に立つて見廻し給え、消えし日のことども忘る時なかるべしとも言ひ度い。

歸路は道滿尾根を下つた。急な降りなのであちこちで休み山を眺めた。休む度に問題となるのは、今日の不思議な晴れ具合のこ

さである。天文學の知識を以てしても解せない雨男凡ちゃん山に登つたのに、どうしてこんなに晴れたのだらう。凡ちゃんは、確信をもつてとうとう新妻晴子さんの御利益が現れたと主張する。そんなことはない、凡ちゃんはウインドヤッケ迄も用意してゐるのだ。僕は昔から秩父では降られた試しがないんだから、やはり僕が来た爲に晴れたんだよと主張する。どつちにも歩はあるがどうも人情の機微には勝てそうも無い。

徳和の部落に降つて初冬の夕霧を知り、堀ノ内の部落で薄暮の空を仰ぐ。窪平に入つた時には、鎌をといだら様な月が中空にかゝつて暗い夜になつてゐた。本體は何れ？凡ちゃんは雨男か晴男？この話は盡きそうもない。二人は今日の楽しかつた乾徳行きに満足して、鹽山驛から汽車に乗り込んだのである。

新宿(十二月三十日夜行) 鹽山 窪平 徳和 扇平 乾徳山
— 扇平 — 道満尾根 徳和 窪平 鹽山 新宿

鷹野雄一君

堀岡 清

鷹野と何の位一緒に山へ入つてゐるか、古い山日記をひつくり返して見ると、あるく、次の通りだ。

昭和八年五月二十七日 新入生歓迎登山 谷川岳

七月二日 三ツ峠岩登り練習

七月十三日より 小槍、穂高縦走

奥穂―デヤンダルム、岳川より奥穂

直登

九月二十一日―二十五日 戸倉―尾瀬―銀山平―大湯

十二月三日 富士山

昭和九年五月二日―八日 奥穂高、前穂北尾根

六月五日、六日 武尊山

七月八日より 剣岳

昭和十年一月一日 八方尾根で出會ふ

一月二十七日 霧ヶ峯

此の外にスキー合宿で昭和八年の冬五色、昭和九年の春野澤があり、同年冬の關も一緒に居たのかと思ふが、或は關へは寄らず眞直ぐ鹿島槍へ入つて居たのかも知れない。こうして見ると兎に角十回以上は一緒にゐるが、それは君の山の第一歩であつたと思ふ。中學時代から山が好きであつた事と思ふが、本當に歩き出したのは失張り専門部に入つてからだと思ふ。當時山岳部は部員の數も少く所謂受難期にあつたのだが、谷川、三ツ峠、穂高と君と一緒に歩くに及んでその氣分の良いのに驚き、優秀部員を得たのに僕はすつかり喜んだものであつた。

そうして以後一ヶ年半位は君の山生活の前半なのだが、殆んど全部僕と一緒に歩いてゐるので、大きく言へば君は僕の手鹽にかけた部員と言ふ事が出来る。後半の山生活は小谷部と一緒に華かに動いてゐた「針葉樹」や「會報」でその活躍振りを見て獨り遙に僕は喜んで居た。

學校を卒業してからは一度門司へ尋ねて来て呉れたが、その時は船の都合でゆつくり出来ずに残りの儘早々に別れねばならなかつたのだが、その後さうく會へなかつたのでそれが君と會つた

最後になつた譯である。

君は誰にも好かれた。それは人柄の故だ。君は割合に無口でしかも「嫌だ」と言ふ事を餘り言はなかつた。之は事山に關するばかりでなく日常の事にも滲み出て居て、君に對する人々に穢かな感じを與へてゐた。年は割に多かつたが氣分的にフケてゐる事もなし、兎に角あらゆる點に於て我々仲間で氣分のヒツタリした人であつた。

今でも残念に思ふのは君が本科に進まなかつた事だ。之は年齢の點もあつた事だと思ふが、君が本科の三年間を持つて居たら定めし素晴らしい足跡を残してゐたであらうし、君自身も更に満足を得て居たであらうし、それ以上に又僕が此の拙文をもつ必要もなかつたかも知れないと、當時本科行きをしきりに勧めた僕としては全く心残りの氣がするのである。

君と一緒に歩いた山行は僕にも楽しい思ひ出だ。その中最初の谷川岳と二年目の穂高岳に就て今尚はつきり残つて居る印象を書いて見よう。谷川岳には先輩吉澤、増山と言ふその道の達人が二人迄加はりながら、狐にでもやられたか耳二つから天神峠へ下る積りで今登つて來たばかりの西黒澤へ逆戻りしてゐたものだ。此の日は残雪が素晴しく多く引返すには新人連の雪溪歩きに困難を思つてその儘西黒澤を下つたのだつたがその時、君は大きな雪溪にぶつかつた初めてらしく、いかにも「素晴しいなあ」と言ふ顔付でフウ／＼しながら黙々と雪溪をトラバースしてゐたのだつた。

翌年五月穂高から二人切りで奥穂へ行つた時だつた。御承知の

通り穂高小舎から奥穂への取付きは一寸悪い。夏でも急な所だ。此の登りで君はつまつてしまつた。ザイルを持たずに行つたので仕方なく上から「そこだこゝだ」とホルルドを教へて見たがどうもうまくないので君には穂高小舎で待つて貰ふ事にして一人で往復する事にし、急いで頂上から引返して最前の悪場迄來ると、ひよつくり下から黒い頭が出て來た。今頃誰か驚いて能く見ると君だ。

「何だ來たのか、大丈夫かい」

「エ、矢張り來ましたよ」

いかにも嬉しさにニコ／＼してゐる。此の時も相當フウ／＼はして居たがもう谷川の時とは拮据ひのフウ／＼だつた。

スキーでの疲い下りや悪場にぶつかつた時、素晴らしい景觀に接した時など「ヒヤッ」と悲鳴をあげる様な感じを君から受けるのだつたが之は單に驚きとか自然に偉壓されるとか言ふ様な意味でなしに自然に同化して行く、自然の中に溶け込んで行く、自己を無にして山と一體となつて行くその感じであつたのだ。こゝに山に對する君の把握があつたのだと思はれてならない。

君は我々に代つて異郷の地に花を散つた。良き友として惜しい人を失つたものたさしみ／＼と悲しく思ふ。然し僕は敢て思ふ。君が山で死んだのでなく戦場の露を消えた事にいさゝかでも慰めを見出すものだ。

鷹野の靈よ、靜かにねむれ、アルプスの峯に。

—二六〇一年正月穂高より歸りて—

記 録

白馬より唐松岳(八月十九日—二十一日) 小柳二郎

夏山の季節も終りに近く、女學生の大群も影をひそめて、大雪溪の人影もチラリホラリと云つたわけで唐松を経て同じコースな黒菱へさ下つたのは僅かにアヴェックが一組さいふ閑散ぶりであつた。

志賀高原の旅

小谷部全助 外三名

八、二五 曇小雨、湯田中(八、〇四)―上林(八、一五)―一〇、三
五―地獄谷(一一、〇〇)―二〇―横湯川廻行―河原小屋(三、
五〇)―四、五〇―發咄天狗の湯(五、二八)

八、二六 雨 發咄滞在

八、二七 雨後止む 發咄發(九、四〇)―丸池(一〇、三〇)―幕

石(一一、一五)―熊ノ湯(一二、〇〇)

八、二八 晴 熊ノ湯(八、〇〇)―笠ヶ岳頂上(九、二五)―四五

―山田牧場(一〇、五〇)―一、三〇―山田温泉(一二、三〇)―
須坂驛

これはまるで高原の温泉巡りと言つた方がよく、年寄りじみたコースだが愉快な連中とのんびり出来た事が取柄なり。殊にこの旅は今度建設する住友のヒュッテ近傍實地踏査云々の名目で、本社からの出張なのだから何をか言はんやである。

奥多摩 越澤

望月達夫 他數名

八月二十五日 晴時々驟雨

古里附(一〇、〇〇)―越澤へ入る―御岳(三、三〇)

海澤や入川谷と共に奥多摩摩澤登りの名所の一つ。たゞ前二者程人が込まないのが取り柄。瀧は二、三見ごたえのあるのがあつたが、源流附近はせまくるしくて感じが悪い。三回程猛烈な夕立にあつた。

那須の山

山口稔一、鈴木英雄

九月十三日 朝上野發―黒磯―那須湯本―大丸温泉泊

九月十四日 大丸温泉―峰の茶屋―朝日岳―清水平―三本槍―

坊主沼―甲子岳―甲子温泉泊

九月十五日 甲子温泉―劍桂―白河―上野

(一)往路は白河上り、歸路は白河發を利用した爲め、近時の殺人的列車風景は無く、ゆつたりと十年位前の山行列車気分を味ひました。

(二)大丸温泉より上にも地圖に郭公温泉と記入がありますが宿はありません。

(三)甲子温泉から白河迄の那須高原は、砲兵の實彈射撃場を通り抜ける爲め、時々通行禁止を食ひます。其の爲めバスの時間も全然あてになりません。

信州峠・横尾山(九月二十二—三日)

中川孫一

信州側の落葉松林の高原は實にのび／＼とした氣分満點の峠路横尾山からの南望はすばらしい。甲州側へ降つて黒森から仰いだ瑞牆は立派だつた。鹽川から八巻迄の鹽川溪谷の紅葉は嘸美事だらう。

小 檜 山

望月達夫 他四名

九月二十三日 晴雲多し

鹽山(三、三〇)―窪平(四、〇〇)―雲峰寺(五、三〇―七、〇〇)―金峰泉(八、四五)―焼山峠―小檜山(一〇、三〇―一二、〇〇)―窪平(二、〇〇)

山には秋の色がきはじめてゐた。雲峰寺で朝食。金峰泉はつまらぬ處。焼山峠ではススキが一面に波立つてゐて實に美しかった。小檜山からは金峰から國師へかけての秩父の大屏風がさえるもなく望まれて、全く素晴らしい眺めであつた。

十石峠・濱平鑛泉(十月十七・八日)

中川係一

神流川源流地方の旅は永年の計畫だつた、鬼石から魚尾ヨノサ(萬場町上流二里)迄秩父青石(三波石)の河床を流れる神流川の溪流美は十年前の兩神山行の思出を蘇へるに充分だつた。坂下(いよ)十石峠の上り路になるといふ意か)から濱平までの本谷は兩岸いよゝゝ迫り紅葉も七分とて秋山を満喫した。濱平鑛泉は戸數十戸足らずの山間の部落、硫黄泉を普通の風呂桶に汲みこんで焚く。とてもよく温まる

坂下から水ノ戸を経て十石峠迄の三里は秩父山塊の餘勢を偲ぶ眞に峠道らしい氣分の横溢した静な山路だつた。峠の眺望は無い。信州側はむしろ閑寂な溪間でものゝ一里も降れば相當に人臭い。相木川を降る榎峠越は御座山附近まで、人跡稀な峠路ではなからうか。静な秋山の旅路だつた。西上州の山は深い。

御坂黒岳

望月達夫 他九名

十月十八日 晴天

富士吉田(四、〇〇)―船津(四、三〇)―河口村(五、二〇―六、三〇)―御坂峠西方の尾根(九、二〇―九、四〇)―黒岳(一〇、二五―

一二、〇〇)―三ヶ尻峠(〇、五〇―一、三〇)―大石村―船津(三、四〇)―富士吉田

黒岳頂上の展望は洵に雄大そのものであつた。南アルプスをあんなに近く見られる處は一す他に見當るまい。甲斐駒から聖岳まで一望の中である。新雪の富士が雲海の上に浮んでゐるのも良く紅葉もきれいで、しかも人つ子一人ゐない静かな山だつた。

御坂山塊縦走(十一月廿三、四日)

中川係一

御坂峠から御坂黒岳を経て十二ヶ岳に至る所謂「御坂山嶺道路」は終始富士山、南アルプス、八ヶ岳、秩父連嶺を望むすばらしい觀光コースだ。殊に黒岳の展望と十二ヶ岳の岩稜が印象的だ。一夜の宿を求めた上芦川村は都廳外の秘境と云つていゝだらう。千木をのせた民家、花崗岩をしきつめた村道、段々畑……。晩秋又は初春の山旅として推賞を惜しまない。

山岳部報告(自昭和十五年四月至昭和十六年一月)

記録

○大澤小屋生活(四、五一―一二)大塚、久保、清水、松下、詳細會報第九十號參照のこと。

○岩殿山(新入部員歡迎登山)(四、二五)岩崎、大塚、日江井、宮城、深谷、山田、久保、小泉、桧淵、佐藤(政)高野、松下、佐野、鈴木、(以下新入部員)川村(本一)、小林(豫二)、菊地、間々田、關根、中林、友田、伯耆、白柳(以上豫一)、細野、柳澤

(以上專一)

近來稀にみる盛大な歡迎登山であつた。頂上で牛肉を煮てコンパをやる。

○三ツ峠山(四、二六) 日江井、樫淵

○富士山(四、二六—二九) 山田、久保、佐藤(政)、小柳、松下

五合目の山梨縣立看護小屋(トタン張り)を借用、佐重の小屋より遙に優秀である。天氣悪く二十九日登頂せしのみ。尙中川、増山、望月の三先輩と一緒に、種々お世話になつた。

○蓬 峠(四、二六) 鈴木

シーズン最後のスキーを楽しむ。

○八ヶ岳(四、二七—三〇) 根本

權現、赤岳を縦走す。權現、赤のコルにビヴァーク。四月も終りとなれば、ビヴァークも大して辛くない。

○甲斐駒ヶ岳(四、二七—二九) 川村、清水、佐野

残雪は黒戸山より。ラッセルに稍々苦しむ。七合小屋より頂上往復。素晴らしい快晴に、快適な登山を楽しむ。

○富士山(五、四—五) 深谷、小泉

天候悪く八合目より引返す。

○奥秩父縦走(五、一七—二〇) 高野、松下、小林、神(新入部員)

新緑の秩父は良い。栃本より入り雁坂、甲武信、金峯を縦走、甲府に下る。

○神津牧場(五、二二) 川村

○鹿島槍・荒澤奥壁(五、二四—二八) 山田、佐藤(政)

荒澤奥壁南稜の登攀に成功す。南稜は傾斜急であり悪場である

が、純粹な岩場に乏しく、スツキリした岩登は味へない。ブツシュに掴つての懸垂上り多く、腕がクタ／＼になつた。

○後立山縦走(五、二九—六、四) 宮城、久保、清水

新緑と残雪の後立山に入る。鹿島槍、爺、スバリ、針ノ木の山々を歩く。颯、立山の方面にはまだ／＼雪が多い。

○谷川岳(六、二) 小泉

○穂高小屋生活(六、五—六、一三) 大塚、日江井、山田、清水、鈴木、佐野、前田

三貫以上の荷があつては、バスに乗れない事になつたので、止むなく重荷をかついで徳本越え。併し後半好天に恵まれ、苦勞はつぐなはれた。瀧谷第一尾根、クラック尾根、前穂高北尾根、ジャンダルム飛驒尾根等に登る。第一尾根はクラックに氷がつまつてゐて、猛然悪く、O・H・Yの三名は岩壁の途中でビヴァークをし、ひどい目にあつた。

○神河内、平湯、乗鞍越え(六、一九—二二) 岩崎

新緑と残雪の山。六月の神河内、徳澤のあたりは實に良い。平湯も感じの良い所だ。乗鞍は雪多く、ゾムメル・シーがあれば、面白く遊べる事だらう。

○針ノ木より薬師へ(七、一二—二四) 宮城、山田、久保、佐藤、小柳、松下、小林、間々田、佐野、前田、細野、柳澤、友田

スゴ乗越附近にて友田遭難の爲め、富山に下る。

(詳細は本會報第九十一號参照の、と)。

○常念、槍、上高地(七、一六—一九) 大塚他一般参加四名

○上高地生活(七、一五—一九) 根本

大塚、根本上高地にて合宿班と合流する豫定なりしも、遭難の旨受電し、安房越え高山より立山温泉に到る。

○大井川東俣生活、鹽見、赤石岳(七、二八—八、三) 清水
連日の快晴に足が獨りでに伸びて了つた。東俣では池の澤を登つて農鳥岳へ行つてみた。

○穂高潤澤生活(八、一〇—一八) 山田、川村、清水、佐野、鈴木、高野、小林、松下
潤澤もこの時期になると人も其れ程多くない。瀧谷のクラツク

尾根、第二尾根、同北山稜、中央稜、第三尾根、ジャンダルム飛驒尾根、北尾根三峰フェース等に登る。中堅部員養成の目的を充分に果し得た。

○美ヶ原(八、二〇—二三) 高野、佐野、松下、間々田

○槍穂高縦走(八、二二—二五) 川村、清水、前田

○槍穂高縦走(八、二八—三〇) 久保、佐藤
兩バーティー共に小槍に攀登す。

○兩神山(九、二—二三) 根本、林、佐藤(眞)

○三ツ峠(九、二—) 久保、清水、佐野、前田

○奥秩父縦走(一〇、六—一〇) 久保、佐藤
金峰より雲取迄、わらちで駆けまはつた。

○白馬より唐松へ(一〇、一六—一九) 清水、佐野
十月も中旬と云ふのに後立山に一片の雪もない。

○八ヶ岳(一〇、一六—一九) 鈴木 他一名
行者小屋に入り赤岳直下を登る

○銀山平より尾瀬(一〇、一六—一九) 松下、伯耆、原田(新入部員)

○荒川谷より白峰越え仙丈へ(一〇、二二—二八) 大塚
荒川谷は案外悪く荷物をもつては樂ではない。遂に北澤落口で引返し、又々釣尾根を登つて了つた。天候悪く豫定の三峰川も中止し、兩俣から大仙丈澤を登つて仙丈へ出たが、兩俣は如何にも南らしい氣持の良い處である。

○前穂高岳、大瀧山(一〇、二—二五) 日江井 他二名
懐しの奥又白を登る。山もよく晴れてくれた。

○三頭山(一〇、二三—二四) 根本、林

○鹿島槍ヶ岳(一一、四—一〇) 山田、松下、小林
雪全然無く白馬への縦走を中止、ノビて了つた。

○德澤小屋、焼ヶ岳(一一、九—一四) 前田

種々の手違ひから一人となり。寂しい山行となつた、新雪を踏んで焼に登る。

○富士山(一一、二—二九) 佐藤、清水、佐野、松下、小林

○冷澤小屋(一二、一—二〇) 久保、山田、佐藤
雪、雪、雪、鹿島槍は手もつけず。

○乗鞍岳スキー合泊(一二、二—二二、三) 岩崎、大塚、山田、久保、根本、佐藤、林、川村、佐野、鈴木、細野、古澤、松下、前田、小林、原田、伯耆、間々田、中林、關根

堀岡先輩兄弟、白石先生、他一般参加七名

總勢三十名、近來稀に見る大合宿であつた。豫科の入山が遅れたのは残念であつたが、堀岡先輩の優秀な指導により一同俄然上達する。

○前穂高岳、焼ヶ岳(一二、二八—一、三) 堀岡先輩兄弟、大塚、

林、松下

素晴らしく良い天氣に前穂に登った。雪の状態良く岳川からのルートは樂であつた。尙この日村尾、小谷部、船本の三先輩等は岳川よりジヤングラムへ行く。

○槍ヶ岳 (一二、二八一、六) 山田、佐野、前田

一ノ俣小屋より往復、小舎は仲々設備よく氣持の良い生活を送ることが出来る。

○白峰北岳(一、二一六) 清水

快晴に恵まれ釣尾根から簡単に往復する。憧れの冬の南の山、バットレスは魅惑的である。

○苗場山 (一、一五一二二) 岩崎、細野、古澤

○野澤スキー行(一、一七一一九) 原田、間々田、伯耆、小林

日誌

○新入部員歡迎會 四月十八日 於國立

豫科、専門部合同の歡迎會を開く。入部者も多く近來にない盛會であつた。

出席者 全部員 新入部員 川村喜作(本一)、小林茂雄(豫二)、菊池慎三、關根勝、友田純一、白柳鎔、伯耆豐次、間々田良雄、(以上豫一) 前田道夫、細野眞令、柳澤信治、古澤孝平(以上専一)

○春山報告會 五月二日 於國立

三月以來の登山の報告をなす。本日一名入部、神 浩(豫二)

○夏山準備會 六月二十二日 於國立

夏山計畫決定、合宿参加者を確定す。

○夏山準備會 六月二十九日 於國立

合宿についてのプリントを配布し、細部に涉つて種々注意を行ふ。

○遭難以後の對策會 七月二十九日 於新宿明葉

○部員總會 九月十四日 於新宿聚樂

遭難經過報告及び遭難を巡つて惹起された幾多の間頭につき代表委員より説明あり。山岳部の今後の態度につき意見の交換をなす。

○秋山報告會、追悼會準備會 十月二十八日 於國立

○故友田純一君追悼會 十一月十七日 於如水會館

午後二時半開會、出席者六十餘名に及ぶ盛會であつた。常盤部長、堀豫科長、中川先輩等の御挨拶について、友田君の思ひ出に移り、先生方、學友、部員等より在りし日の純一君の面影が種々の角度から話され、感銘深きものがあつた。次いで父君銈三郎氏立ち、吾子を山に失ひし父としての心境を述べられ、殊に山岳部は大きくせねばならぬが、遭難は絶對になくしたいとの言葉は部員一同の銘記せねばならぬものであつた。中川先輩の「山の幸」と題するユーモアに満ちた御話をうかゞつて後、かねて友田家より申出のあつた記念寄附金(金壹千圓也)の拜受をなし、午後五時半閉會した。

尙當日針葉樹會員多數御出席され、種々御助力を戴いた事に對し深い感謝の意を表します。

○先輩學生懇親會 十二月七日 於國立

出席者 村尾、増山、柿原、望月、森脇、鷺崎の六先輩及び現
役側十二名

○冬山準備會 十二月十日 於國立

○冬山報告會 一月十三日 於 "

○春山準備會 一月二十日 於 "

鹿島槍東面の地形説明、極地法について種々論議す。

昭和十六年度役員左の通り決定。

(本科) 代表 山田亮三 圖書 樫淵 明 庶務 久保孝一郎

記録 根本 大 器具 佐藤政雄 會計 林 正敏

(豫科) 代表 松下順吉 器具 原田 豊 會計 小林茂雄

(専門部) 代表 佐野茂雄 器具 前田道夫 會計 細野眞令

針葉樹會定例集會 一月二十一日(火) 於如水會館

出席者(會員) 吉澤、村尾、久保田、手塚、増山、堀岡、林、

柿原、松浦、望月(部員) 大塚、日江井、山田、佐藤(政)、林、

松下、原田、前田、清水、古澤、佐野、高野、小林

戦死された鷹野雄一君の遺骨は舊臘二十九日松本聯隊に歸還、

来る三月頃神奈川の御宅に於て葬儀執行せらる可き旨出席諸氏

に通知す。尙同君追悼録の件は追て詳細發表すること。山岳部

より冬山報告、春山の計畫發表あり。十時近く散會。

臨時針葉樹會集會 一月三十日(木) 於如水會館

出席者(會員) 吉澤、村尾、堀岡、黒田、小谷部、森脇、望月、

鷺崎、小柳、(部員) 大塚

暮の二十日に召集解除となつた黒田、上京中の小谷部兩君を迎

へて、クマさんを中心に近頃問題の日本山岳聯盟の話などに
實が入り、近頃愉快な一夕を送つた。

針葉樹會定例集會 二月二十日(木) 於如水會館

出席者(會員) 中川、増山、増岡、黒田、柿原、望月、佐々木、

小柳(部員) 大塚

スキーシーズンたけなはなる折柄、豫定や計畫等で賑つた。

鷹野雄一君の御遺骨は三月八日(土)夕刻頃横濱市神奈川の御自宅
に凱旋され、同廿日午前十時より自宅に於て告別式がまじり行は
れました。本會からは増山、望月の兩君が代表として參列致しました。

計報

金田一郎君 二月十五日御尊父を喪はれました。

小谷部全助君 三月十二日御尊父を喪はれました。

謹んで哀悼の意を表します。

消息

常盤敏太郎長(住所變更) 東京市牛込區宮比町五

林 俊介君 昨年十一月御結婚さる。新夫人晴子様。

佐々木 誠君(通信先) 瀧野川區瀧野川町、東京第一陸軍造兵

廠經理部見習士官宿舍内

原 鐵三郎君(入營) 世田谷區陸軍東部第十二部隊神崎隊ノ一

黒田正治君 昨年十二月二十日召集解除(通信先) 大阪市北

區新川崎町一、三菱鑛業株式會社大阪製鍊所

小谷部全助君(轉任) 住友鑛業株式會社東京支所(住所) 品川

區大井元芝町八四九